



たまたばこ 時と共に変わる家



進藤 麻理 (しんどう まり)
日本大学 生産工学部 建築工学科

たまたばこ一同と共に変わる家

どんな家で、誰と、いつ、どの場所で・・・住宅を建てるには考えることが沢山ある。

しかし、どんなに先を見越していても、旅立っていった子どもの部屋は使われずに物置のように扱われてしまう。結婚、出産、成長で人が変わっていくように、住み方や生活を変えることのできる住宅が必要なのではないだろうか。

建築には、家具や扉などの可動が使われている。それら可動するもののスケール感や組み合わせを検討したところ、FLEXIBLEな空間や移動可能な空間は、可動によって作り出されていた。

家族の間で起きる長期的にみた変化は「家族構成の変化」毎日起こる変化は「日常の変化」であると考え、この2つに着目し、3間×3間の狭小住宅でFLEXIBLEな住宅を提案する。

家族構成の変化

- 1歳児
- 2歳児
- 3歳児
- 4歳児
- 5歳児
- 6歳児
- 7歳児
- 8歳児
- 9歳児
- 10歳児
- 11歳児
- 12歳児
- 13歳児
- 14歳児
- 15歳児
- 16歳児
- 17歳児
- 18歳児
- 19歳児
- 20歳児

日常の変化

- 1歳児
- 2歳児
- 3歳児
- 4歳児
- 5歳児
- 6歳児
- 7歳児
- 8歳児
- 9歳児
- 10歳児
- 11歳児
- 12歳児
- 13歳児
- 14歳児
- 15歳児
- 16歳児
- 17歳児
- 18歳児
- 19歳児
- 20歳児

講評

この「たまたばこ」は他の14作品とは異なり、個人の住まい方を通して建築モジュールを扱った作品である。人間のライフサイクルの家族構成と日常の変化に着目して、3間×3間2層の限られた空間を「たまたばこ」に見立て、移動できる家具や収納を壁や床に変化させることで、多様で快適な住まい方を提案している。規格化された工業製品の家具そのものを建築構造体とした建築家・坂茂氏の「家具の家」や、京都工芸繊維大学とココヨの提案する「コンテナ住居」を目指したものは推測の域を出ないが、ここで習得した技術は即応用が可能であると確信新している。住まい方のモジュールと工業化のためのメカニカルな技術を利用して、例えば2.5mのオントラック幅のスペースに応用し製品化できれば、被災後数日以内に設置可能で、且つ移動可能な復興住宅となり、災害を被った人々の苦痛の軽減になることは確かである。そのための新たな技術開発も必要と思われるが、迅速なうえに省スペースで快適な生活空間の提供を可能となるために、更なる研究・改良に期待したい。

(審査委員：古川 洋)

